

毎月第一週に配信する「今週の倫理」では、倫理研究所第二代理事長・丸山竹秋（一九二一—一九九九）のことは掲載いたしません。

昨年（昭和四十二年）の夏、倫理研究所・所歌の作詞を頼まれた。

私は辞退した。思いもよらぬことだったからである。そして自信もなかった。しかし、再三にわたるすすめで、ついに私は意を決した。及ばずながら、全力をあげようと誓った。

それから数日後、富士山のふもとにこもった。きめられた講義以外のしごとは、まったく手につかない。寝ても起きても歩いても坐っても、風呂に入っても、そのことばかり考え続けた。

そして、いろいろと熟考した結果、つぎのように作詞した。

#### 世紀の歩調

一、あめつちに 光みなぎり

さやなかる ひとすじの道

明るく ほがらかに

果てまでひびけ 世紀の歩調

二、大自然 恵み豊かに

はるかにも 行手かがやく

よろこび 働きて

高鳴りやまぬ 世紀の歩調

三、人の世に 純情（まごころ）あふれ

きずきゆく 文化のいしずえ

愛和の 旗かかげ

たずさえ進む 世紀の歩調



## 「世紀の歩調」の精神

丸山竹秋

要するに、明朗、喜働、愛和と、そして純情の実践によって、ひとすじに世界の平和と人類の幸福をきざく大道を、高らかに歩調をそろえて堂堂と前進しようというものである。意あまって言葉足らず、抽象的な言葉の羅列で具体性に乏しく、表現も拙劣であるけれども、しかし心をこめて、苦心してつくったものであることにちがいはない。

私は、真剣に考える。いったい人類は、道徳性といったようなこと、とくに人間尊重といったようなことについては、大昔から果してどのくらい進歩してきたであろうか。現代人は、いわゆる文明とか文化とかの美名にかくれて、その実、しだいに野蠻になりつつあるのではないか。たとえば戦争である。

文化とか文明とかいっても、それは、人間尊重をもっとも重大な基礎にして成りたつのでなければ無意味だということだ。たんなる科学技術の進歩は、それだけでは人類を幸福にはしない。科学技術は人間を幸福にもするが、不幸にもする。毒ガスは科学（それも化学が主）によって作られたものであるが、人間の生命をうばう働きもするのである。

人間尊重とは倫理性をその根本とする。広い意味のそして正しい意味の倫理、つまり「徳福一致」の倫理こそ人間尊重のヒューマニズムを確立するものだ。

世紀の歩調は、こうしたところから人間尊重の大道をすすんでゆき、世界の平和をきざいてゆこうとするもつとも勇気ある人々によって高鳴るのである。

〔青年〕1968年1月号より